

令和7年度第2学期終業式式辞

おはようございます。

穎明館生の皆さん、第2学期終業式、「節目」の日です。気持ちの区切りをつけ、次なる目標を設定するには絶好のタイミングです。皆さん、それぞれの2学期はどうだったのでしようか。自分自身を見つめ直し、これから自分の在り方生きを考え、成長しようとする………皆さんは若い。「節目」ごとに何度も何度も繰り返すのです。そもそも「節目」とは木材、竹などの「節」のある部分を指します。竹は「節」があることで、強風にも負けない反りの強さを身につけ、成長するといいます。2学期に失敗をした人は、今一度、反省して、強さ、たくましさを身につけ、成長につなげてほしいと思います。

6年生、39期生の皆さん、「人生の節目」という言葉もあります。皆さんのが挑む大学受験は、まさに「人生の節目」となるでしょう。追い込みの時期ですね。「現役生は受験当日まで伸びる」。自分を信じて、焦らず、恐れず、怠らず、着実に努力を続けてください。

さて、残りわずかとなった今年、2025年を振り返ると、日本社会においても節目の年でした。今年はとくに「戦後80年」の節目の年と言われ、マスコミなどでもよく特集が組まれました。

「戦後80年」、第二次世界大戦が終わってちょうど80年がたちました。この間、大戦と言われる戦争はありませんでしたが、近年では地域的な戦闘が増え、大きな戦争への危険が増しているようにも思われます。ロシア、ウクライナ、イスラエル、パレスチナ………世界には今、この瞬間にも戦争、紛争が続いているところがあります。画像、映像を見るたびに、その悲惨さには、やり場のない怒りさえ感じます。一方で私には、「日本は平和でよかった」という正直な気持ちもあります。それでもすぐに、「平和は誰かから与えられるものではない」という戒めの言葉でその気持ちを打ち消します。

穎明館生の皆さん、どうでしょうか。

身近なところから考えてみてください。

身のまわりの平和を創っていくということを体験的に学ぶことが、平和教育の始まりだといわれます。「みんな仲良く」は難しくても、一定の距離を保ちながら人間関係を築いていく、そういう術を日々の学校生活を送りながら学んでいく。きっと多くの皆さんには、そうやって、時に仲間とぶつかりながらも、上手に仲間との関係性を築いていると思います。絶対にやってはいけないことは、自分と相性が悪いから、気に入らないからといって、他者の人

権を侵したり、自由を奪ったりすることです。人権問題であるいじめは、まさに平和を侵す行為です。皆さん自身が、身の回りのいじめや差別、誹謗中傷などへの想像力をもち、感受性を高めていくことが平和を創ることにもつながる、ということをよく覚えておいてください。戦争がなければ平和ということではない。例えば、自分自身で無関心を決め込んだり、他者を孤立に追い込んだりすることも、静かな暴力と言えるでしょう。平和は関係性の中に成り立ちます。ウェルビーイング——自分と他者が幸福であること、社会や環境が幸福な状態であることが平和につながるのです。誰かとつながりながら協働して平和を創っていくためにも、皆さんにはこれからもしっかりと学び続けてほしいと思います。

ところで、「節目」の年ということでは本校、穎明館にとっても 2025 年は、創立 40 周年の節目の年でした。10 月にはホームカミングデーが行われ、懐かしい多くの卒業生が来校されました。卒業生は学校の宝、そして母校が心の故郷であるならば、教育は宝が埋まっている故郷を豊かにする営みであり、卒業生は故郷を豊かにしてくれる存在だと、改めて思った次第です。皆さんも数年後には、そういう存在になっていくのですね。楽しみです。

また、「節目」の年ということでは、穎明館にとって、2015 年にイートンサマースクールに参加するようになって、ちょうど 10 年の節目でもありました。そして 10 年間、イートンと穎明館の友好関係を深める上で重要な立場にあったサマースクールの責任者、ジョージ＝ファシー先生が、先日、定年退職されるということもありました。

ファシー先生は大変な親日家であり、サマースクールが始まる際には、穎明館にもご来校されました。熱心に学校見学をされ、充実した施設や活発な穎明館生の様子に感心されました。社会茶道部ではお点前を心底、楽しまれていました。一方で、私がイートンを訪問した際には、ファシー先生のご自宅のホームパーティーにご招待していただき、心温まる交流を深めました。チームズ川に沿った広い芝生のお庭に、大きな犬が大人しく寝転び、その周囲では大人が談笑にふけっており、まるで映画の一場面のような思いでした。

今回、ファシー先生の退職にあたっては、イートンサマースクール参加各校の関係者が、日本全国から東京に集まり、感謝の会が行われました。笑顔いっぱいのファシー先生の挨拶で、披露されたのは、なんと日本のことわざ二つです。紹介します。

一つめは「井の中の蛙 大海を知らず」。自分の狭い知識や経験にとらわれて、他に広い世界があることを知らないようではいけない。広い視野に立って物事を見つめていきたいものですね。

もう一つは「一期一会」。茶道に由来するこの言葉は、一生に一度の機会、出会いを指します。どんな瞬間も二度とは訪れないから、目の前の人と誠心誠意向き合い、その時を大切

にしようという教えが込められています。

大変な親日家であり、イートンの教えを体現するファシー先生らしい言葉での挨拶に、私はいたく感動しました。そして節目の 10 年を経て、これからイートンと穎明館の関係、絆をさらに深めていきたいと決意したところです。今後も、可能な限り多くの穎明館生に、イートンサマースクールに積極的に参加してほしい。そこで今日は、この『ABOUT ETON』の一節を皆さんに紹介したいと思います。

イートンは人生で何か有意義なことをなすことが期待されている青年のための場所である。ほぼ 6 世紀にわたる歴史はさほど重視されてはいない。イートンの過去が教えられることはほとんどない。しかしこの伝統が息づく学校はある一つの問いを生徒に提示する。イートンを卒業していった何世代もの青年がこれまで偉業を成し遂げてきたとするなら、君にできないことがあるか。伝統というものは行動を制約するものではなく、行動を促すものなのだ。これにいくつかの物を加えてみよう。お互いが優秀だという期待、自立心を持つのは美德だという信念、他人に返すべきものがあるという道徳的な義務感。すると青年に自信を与えるカクテルができる。自分には世界に違いをもたらすことができると思える自信を。

他人に返すべきものがあるという道徳的な義務感、すなわちイートンの教えの中核には、「ノブレスオブリージュ」(高貴なる者の義務) があると言われます。「ノブレスオブリージュ」——社会的に恵まれた地位にある者は、その特権に見合った社会的責任を果たすべきである。イートンを範として創られた穎明館の教育目標は、「国際社会にはばたく真のリーダーの育成」——ノブリスオブリージュに通じます。「真のリーダー」は、弱者への配慮や自己犠牲の精神も持ち合わせていてほしい、平和な世界に貢献できる人であってほしい。

穎明館生の皆さん、今日は「節目」の話から、平和を創ること、イートンに学ぶ「ノブレスオブリージュ」に至るまで、壮大な話をしました。校歌の「理想は高し」、校訓の「何ごとによらず、その目標は高く設定すべきである」を意識しましょう。冬休み、そして新たな年を迎える節目に、意識を高く持って自分自身を見つめ直し、これから自分の在り方生き方を考えた皆さんと、新年、第 3 学期始業式にまた元気に会うことを楽しみしています。

以上、令和 7 年度第 2 学期終業式式辞といたします。